

● シリーズ 私の見た日本 Vol.248

小ささの中にある豊かさ 日本で学んだ人間尺度

董 珊珊 (トウ サンサン)

1999年、中国雲南省生まれ。2022年、中国・西北農林科技大学卒業。2025年より東京造形大学大学院デザイン研究科に在籍し、空間デザインを研究している。



私が初めて日本に興味を持ったきっかけは、中学生の頃に偶然耳にしたシティ・ポップだった。洗練されているながら、どこか懐かしさを感じさせるメロディーに惹かれ、その音楽が生まれた時代の都市文化や人々の暮らしについて調べようになった。音楽を入口に、建築やアニメーション、プロダクト、ファッションなどへと関心が広がり、当初の漠然とした好奇心は、次第に日本の文化をより深く知りたいという思いへと変わっていった。大学でデザインを学び始めてからは、特に日本の建築やプロダクトに注目するようになった。そこで目を引いたのは、印象的な造形だけでなく、素材の使い方や細部の納まり、さらに使う人の身体や何気ない動作まで丁寧に考えられている点だった。こうしたデザインを実際の生活の中で体験し、その背景にある考え方を学びたいと思い、私は日本への留学を決意した。そして2022年7月に大学を卒業すると、ほとんど間を置かず日本へ渡った。来日以前の私は、デザインを見ると、形態の新しさや視覚的な印象、スケールの大きさに目

を向けることが多かった。ところが、日本で生活しながら身の回りのものを観察していると、デザインの魅力は必ずしも目立つ造形や大きな空間にあるのではなく、人の身体や動作、感覚、そして日常生活への細やかな応答の中にも存在することに気づいた。

数センチに込められた配慮

日常生活の中で、最初にそのことを実感したのは日本のバスだった。初めてバスに乗ったとき、乗客が乗り降りする停留所で、車体がゆっくりと歩道側へ傾くことに驚いた。これは「ニーリング機能」と呼ばれるもので、乗降口の高さを下げ、歩道との段差を小さくするための仕組みである。高齢者や車椅子利用者、ベビーカーを使用する人だけでなく、荷物を持った人や子どもにとっても、乗り降りの負担を軽減することができる。車体がわずかに傾くという変化は、外から見ればとても小さなものかもしれない。しかし、その数センチの動きによって、誰かが安心して一歩を踏み出せるようになる。私はその

とき、デザインとは新しい形を生み出すことだけではなく、人の身体に合わせて環境の側が静かに動き、寄り添うことでもあるのだと感じた。バスの中を見渡すと、降車ボタンの位置や手すりの高さ、優先席の色、乗降口までの動線など、一つひとつが異なる身体条件を持つ人々の行動と関係している。普段は意識せずに利用している設備にも、「どこに手を伸ばすか」「どのように身体を支えるか」「どのくらいの高さなら無理なく使えるか」という、人の身体を起点とした寸法と配慮が隠されている。

私は、こうした身近な体験を重ねる中で、「人間尺度」という言葉を、単なる人体寸法の基準としてではなく、人の動きや感覚、他者との距離まで含めて考えるための視点として捉えるようになった。そして、この視点は、バスや日用品だけでなく、日本の街や建築空間を観察するときにもつながっていった。

暮らしの気配をたどる散歩

休日や少し時間が空いたとき、私は行き先を決

めず、気になった駅で降りて、その周辺を歩くことが好きだ。にぎやかな商店街に出会うこともあれば、観光地から離れた静かな住宅地に迷い込むこともある。目的がないからこそ、普段なら通り過ぎてしまう小さなものに目が留まる。来日前から、日本には一戸建て住宅が多いことを知っていた。実際に住宅地の中を歩いてみると、一戸建ては単なる居住形式ではなく、そこに住む人の時間や生活に対する姿勢を映し出す存在でもあったと感じた。玄関先には住民が少しずつ育ててきた草花が並び、門扉や郵便受けの周りには季節に合わせた小さな飾りが添えられている。使い込まれたじょうろや自転車、子どもの遊び道具などにも、その家で営まれている日常が静かに表れている。それらは、最初から建築家によって完成された演出ではない。住む人が毎日の暮らしの中で植物を植え、物の位置を変え、必要なものを少しずつ加えることで、住宅の表情が時間をかけてつくられていく。きれいに統一されすぎていないからこそ、それぞれの家に異なる個性があり、

自然で親しみやすい風景が生まれている。玄関先の植木鉢や小さなベンチは私有地の中に置かれていても、道を歩く人の目に触れ、街路の風景の一部になる。室内で完結するはずの暮らしが住宅の外側へわずかににじみ出し、道を歩く人に住民の気配や季節の変化を伝えているのである。私は住宅地を歩きながら、建築は完成した瞬間で終わるものではなく、人が住み、手を加え続けることで、少しずつその場所になじんでいくものなのだと感じた。

歩くことで見えてきた町の尺度

このような人の身体を起点とする視点は、プロダクトや交通機関だけでなく、日本の街や建築空間を観察するときにもつながっていった。日本の街を歩いていると、大通りから一本路地に入っただけで、空間の感じ方が大きく変わることがある。道幅は狭くなり、建物との距離が近づき、それまで見落としていた人々の暮らしの気配が見えてくる。街は遠くから眺める対象ではなく、自分の身体で歩き、立ち止まりながら

体験する場所へと変わる。

特に興味を持ったのは、小さな店舗の活動が街路へ少しずつ延び出している光景である。飲食店のテーブルや椅子、メニュー看板、商品を入れた箱、植木鉢などが、建物の中だけに収まらず、店先や軒下に置かれている。店内の活動が街路へ「にじみ出す」ことで、店舗と道路のどちらとも言い切れない中間的な領域が生まれている。街を歩いていると、店主が店先で木材を切ったり、組み立てたりしている姿を見かけることもある。手づくりの看板を取り付けていることもあれば、店先の寸法に合わせて長椅子や商品棚をつくっていることもある。日本では、必要なものをすぐに既製品でそろえるだけでなく、自分の手を動かし、その場所に合うように工夫する文化が身近にあるように感じる。少し不揃いな文字や木材に残された加工の跡からは、店主の個性や店への思いが伝わってくる。こうした手づくりの要素も、日本の街を特徴づける風景の一つなのではないかと思う。

それぞれの店主が、営業や生活の必要に応じて物を少しずつ加え、位置を調整しながら使い続けることで、同じ路地にも店ごとに異なる表情が生まれる。一軒一軒の店が、椅子や看板、植物といった小道具を持ち寄り、路地という一つの舞台と一緒に演出しているようにも見える。道に置かれた看板は歩く人の速度を緩め、店先の椅子は人が立ち止まるきっかけをつくる。会話や食器の音、料理の香りも建物の境界を越えて路地へ広がり、通り過ぎるだけでも、そこで営まれている生活の一部に触れることができる。

私にとって人間尺度の街とは、単に小さな街ではなく、人の歩く速さに合わせて、少しずつ表情を見せてくれる街である。看板や植木鉢、手づくりのベンチ、店の中から聞こえる話し声に気づき、思わず足を止める。日本の街の面白さは、地図を上から眺めるだけでは分からない。寄り道をし、ときには道に迷いながら歩くことで、初めて出会えるものなのだと思う。



左／吉祥寺駅周辺の店舗による店先空間の演出 中上／住宅の玄関先ににじみ出す暮らしの気配 (撮影：LI WENHAN) 中下／西荻窪駅周辺を散歩する筆者 右／喫茶店の店先の風景 (撮影：LI WENHAN)



店先で時間をともにする店主と猫



表参道周辺に見られる、植栽と看板による店先空間の演出